

令和 5 年 10 月 11 日

四万十町長  
中尾 博憲 様

元「四万十町文化的施設検討委員会」有志



[Redacted]  
[Redacted]  
[Redacted]  
[Redacted]  
[Redacted]  
[Redacted]

※ 7 名 (氏名塗りつぶし)

四万十町文化的施設計画事業の継続を求めます(要望書)

令和 5 年第 3 回四万十町議会定例会第 10 日目(9 月 22 日)における町長発言(文化的施設計画事業の休止)に対し、下記の理由から当該事業の継続を求めます。

私たちは、平成 29 年 9 月 30 日に、四万十町長から、四万十町の将来を担う子どもたちを豊かに育み、合併で広域になった四万十町に新たな賑わいを創出して、町民の暮らしの基盤となる文化活動を支えながら、四万十町の歴史と自然を後世に伝え続ける文化的施設の建設に向けた検討を委嘱・依頼されました。

検討委員会では、令和 2 年 3 月までの任期中、2 年半の間に 17 回にわたる会議を丁寧に進めながら、意見を取りまとめました。その間には、事務局の教育委員会と協働し「中高生ワークショップ」や「まちあるきワークショップ」「ストーリーづくりワークショップ」「米こめフェスタ」など町民参加型のワークショップを繰り返し実施し、シンポジウムや施設についての意見交換会、プロポーザル等に出席、先進地での視察も行い、学びを深めながら活動してきました。検討委員のなかの有志、協力者、行政と協力し参画した米こめフェスタでは、事前に保・小・中高校生のメッセージ 1000 通以上の協力を頂き、「もっと沢山の本に囲まれたい」「もっと色々な色がついている図鑑がいっぱい見たい」「もっと外国の本を読みたい」など「もっともっと」といった切実な子どもたちの願いを目にしました。今の四万十町ではこの程度の願いも叶えられないのかと涙が出ました。もうすぐ願いが叶うから、と想いを強くもしました。ワークショップでは「絵が描けるアトリエが欲しい」と言った高校生もいました。当時の子どもたちを 6 年間も待たせたままの今があります。残念なことに、元検討委員のうち数名は他界されました。6 年の歳月の重みを深く感じます。

四万十町は、本検討委員会による意見集約を踏まえて、平成 31 年 3 月に『四万十町文化的施設基本構想』、令和 2 年 2 月に『同基本計画』を策定しました。その後、令和 3 年 3 月に『同基本設計』、令和 4 年 3 月には元検討委員会との意見交換も行いながら『同サービス計画』を策定、さらに令和 4 年 10 月に『同実施設計』を完了して本事業を計画的に進めてきたこと、さらには、特設した文化的施設整備推進室を中心とする町民への熱心な啓発活動(27 号に及ぶ広報の発行や各地での町民説明会・意見交換会の開催、ケーブルテレビでの発信、イベントの敢行)の推進など、文化的施設のハードとソフトの両面から一歩

一歩着実に本事業を進めてきたことに大きな敬意を持ちながら、多くの町民と同様にその開館を待ち望んできました。

このように四万十町文化的施設計画に初期の段階から今日に至るまで真摯に関わらせていただいた私たちにとって、本事業が休止になることは何としても回避したいことであり、その継続を強く求めるものです。

## 記

1. 文化的施設に対する町民、とりわけ若い世代の期待は大きく、四万十町の将来を担う世代にとっての学習文化芸術環境の整備が、急務かつ不可欠であること。
2. 地域の疲弊・衰退は、自治体合併以降も悪化をたどっており、四万十町を構成する窪川・大正・十和の人びとが集い語り交流する、暮らしの基盤となる活動を支える場の整備が不可欠であり、その施策に断絶があってはならないこと。
3. 本事業は、町民の民意を一定反映し、制度的にも段階を踏んで、合法的に着実に進められてきたものであり、この段階において、理不尽ともいえる議会決議により休止に追い込まれることは政策的にも到底受け入れられるものではないこと。